

〈シンポジウム〉カントとフィヒテ—カント生誕300年

「カントとフィヒテ—カント生誕300年」司会者報告

伊藤 貴雄

1 シンポジウムの趣旨

2024年は、イマヌエル・カント(1724-1804)の生誕300年という記念すべき年であった。この節目に際して、世界各地でさまざまな記念事業が企画され、国際的にカントの思想的意義を再確認する機会が広がった。

筆者の知る限りでも、日本哲学会第83回大会(高知大学、5月)、第24回世界哲学会議(ローマ大学、8月)、国際カント協会(ボン大学、9月)、日本デューイ学会(創価大学、9月)、日本カント協会(東北大学、11月)等において記念のシンポジウムやワークショップ等が開催された。こうしてカント300年は、哲学の多様な領域においてその根本的な問いをあらためて呼び起こす契機となったのである。

日本フィヒテ協会も、こうした国内外の潮流と呼応するかたちで、同年11月23日、大阪大学豊中キャンパスにて「カントとフィヒテ—カント生誕300年」と題するシンポジウムを開催した。登壇したのは、内田浩明氏、浜野喬士氏、浜田郷史氏の三氏であり、司会を筆者が務めた。本シンポジウムの趣旨は、フィヒテ研究の立場からカントを振り返り、両者の思想的関係を新たに問い直すことにあった。

周知の通り、カントとフィヒテの関係については古くから夥しい数の研究が蓄積されており、二人の思想的連関をめぐる論争や再解釈は、ドイツ観念論研究の中心課題の一つであり続けてきた。しかしながら、いかに多くの議論が積み重ねられたとしても、両者の関係を語り尽くすことは不可能である。むしろ、研究が進むごとに新しい文脈や資料が発掘され、両者間の思想的影響／緊張関係に新たな光が投げかけられてきた。本シンポジウムもその一環として、フィヒテの理論哲学を深く研究してきた三名の報告者を迎え、カントとフィヒテの根幹的テーマをあらためて検討する場を提供するものであった。

2 各提題の要点

本シンポジウムでは三名の報告者が、それぞれ異なる切り口からカントとフィヒテの思想的関係を検討した。以下では、その順に各提題の概要を紹介する。

(1) 内田浩明「カントとフィヒテの自我論再考—統覚論と知的直観を手がかりに」

第一報告を行った内田氏は、カントとフィヒテにおける自我論を比較し、その異同と接続の可能性をあらためて検討した。カントは『純粹理性批判』において「統覚の統一」を自我の基礎とし、

感性と悟性の峻別を通じて自我を把握したが、その際「知的直観」は人間には不可能とされ、神の特権的能力に限定された。したがってカントにおける自我は、感性的与件に依拠した有限的主体としてのあり方に制約され、この「二重の自我」の構図はやがて「理性の事実(Faktum der Vernunft)」の議論と接続することになる。

これに対してフィヒテは、イェーナ初期の『全知識学の基礎』(1794/95年)において「事行」の契機を導入し、自我を、能動的に自己を基礎づける存在として捉える。ここでは「知的直観」が「自己直観」として再定義されるが、本格的に展開されるのは『第一序論』『第二序論』以降である。内田報告は、この直観をカントの「統覚論」との比較のもとで分析し、両者の差異を「理性の事実」と「自我の活動性」という二つの対概念で整理した。

さらに報告では、「無神論論争」後のフィヒテの展開にも目が向けられた。自我概念は主客の絶対的合一や「自己内還帰」といった観念を経て、宗教的・存在論的地平にまで拡張する。その過程においてカント的要素は継承されつつも超克が試みられたが、同時にフィヒテはなおカントの問題圏にとどまらざるをえなかった。内田氏はこの二重性を指摘し、フィヒテが「カントを越えようとしつつ離脱しきれない」という姿勢を鮮明にした。この報告は本誌には収録されないが、シンポジウム全体にとって基調的な問題提起を果たしたといえる。

(2) 浜野喬士「プラトナーを挟んで対峙するフィヒテとカント」

第二報告を行った浜野氏は、フィヒテとカントを直接に対比するのではなく、両者の間にエルンスト・プラトナーを媒介として挟み込むことで、思想的関係を新たに描き出そうとした。プラトナーの『哲学的アフォリスメン』(1793年版)は、フィヒテが『論理学・形而上学講義』(1797年)で実際に教科書として用いたものであり、カントも「人間学講義」やレフレクシオンにおいて繰り返しその議論を批判的に参照していた。こうした史実に基づき、浜野報告は「プラトナーを経由する」独自の三者比較の枠組みを提示した。

具体的には、「哲学的精神」「哲学的頭脳」「哲学的天才」というプラトナーの三区分を手がかりに、フィヒテとカントの位置づけを検討した。フィヒテは哲学的精神を天才と同一視し、芸術家や詩人との共通性を認めるのに対し、カントは生成期には哲学的精神を天才と結び付けつつも、批判哲学の形成とともに哲学を天才から切り離す方向へと転じた。また「哲学者」と「狂信者」をめぐる議論については、プラトナーが精神を持ちながら頭脳を欠く者を狂信者と呼び、フィヒテがそれを「力はあるが秩序を欠く存在」と捉えていたことが紹介された。

報告はさらに、「魂の座(Sitz der Seele)」をめぐる三者の立場の違いにも触れた。プラトナーは脳や神経の理論に基づき心身関係を論じ、カントはこうした自然学的推論を人間学から排除した。フィヒテは独断論を退けつつ知識学的構成に転換し、身体と魂の関係を自我の自由な活動の観点から再解釈したのである。浜野報告は、このようにプラトナーを媒介とする比較を通じて、カントとフィヒテの関係を従来と異なる角度から立体的に照射した。

(3) 浜田郷史「フィヒテとカントの空間論」

第三報告を行った浜田氏は、カントとフィヒテの空間概念を比較し、その連続と断絶を「コペルニクス的転回」という大きな文脈の中で再検討した。カントにおいて空間は「感性の純粹形式」として規定され、幾何学的認識の可能性を根拠づける。報告では特に「形式的直観」と「直観の形

式」という二重の契機に注目が集められた。前者は主体を中心とした座標系という観点依存的な空間を意味し、後者は「無限性」「一性」「先行性」を特徴とする全体(totum)としての空間を指す。星空に対する畏敬や「無限空間への驚愕」は、この両者の緊張関係に結びつけられた。

これに対してフィヒテは、カント的空間を「堅固さを欠き無へと消失する」と批判する一方、その「消失」こそが空間の真の本性を明らかにする契機であると論じた。フィヒテは「前提＝前措定(voraus-setzen)」という概念を導入し、量化作用に先立つ量化可能性としての空間を提示したのである。これは、空間を自由の産物とみなし、知的直観によって把握されるものとして再構成する試みであった。

浜田報告によれば、カントが幾何学的認識の可能性を基礎づける一方で、フィヒテはその基礎の揺らぎを積極的に引き受け、「前提」という思想のもとに空間を再構想する。こうして両者は、いずれもコペルニクスの転回の思考法を継承しながら異なる仕方で展開しており、単なる継承や批判ではとらえきれない緊張と相互作用が明らかとなった。この報告は、空間論という基礎的テーマを手がかりに、近代哲学における認識・自由・有限性をめぐる問題群の新たな射程を照らし出すものであった。

3 総括コメント

三つの報告はいずれも、カントとフィヒテという二大哲学者の関係を論じながらも、アプローチの方法と論点の設定において明確な特色を備えていた。内田報告は、自我をめぐる根源的概念に立ち返り、カントの統覚論とフィヒテの事行論を精緻に比較することで、両者の思想的断絶と接続を明らかにした。浜野報告は、プラトナーという同時代の思想家を媒介に据えることで、従来の「カント＝フィヒテ」の二項対立的図式を相対化し、より広い哲学史的文脈の中で両者の位置関係を浮かび上がらせた。そして浜田報告は、「形式的直観」と「直観の形式」の二重性や「前提＝前措定」という概念を手がかりに、空間という基礎的カテゴリーを通じて批判哲学と知識学の連続と差異を認識論的・存在論的に比較し、両者の思想的緊張の根本構造を鮮明に示した。

このように三報告はそれぞれ異なる観点からカントとフィヒテを問い直したが、その差異は単なる分岐ではなく、相補的な関係をなしている。内田報告の自我論的分析は、主体性と自由の基礎づけをめぐる問題に新たな焦点を与え、浜野報告のプラトナー媒介的比較は、思想史的コンテクストを広げることで両者の位置関係を立体化した。そして浜田報告の空間論的比較は、認識の条件という基礎的次元に光を当て、両者の差異が認識論的構造そのものに及ぶことを示した。換言すれば、内田報告が「自我」という内的基礎の次元を、浜野報告が「哲学的精神／頭脳／天才」や「狂信」といった議論を含む人間学的次元を、浜田報告が「空間」という認識の形式的次元を扱ったことで、三報告は理論哲学と実践哲学を架橋し、両者を包括する視座を提示したといえる。

こうして以上の三つの視角は、互いに異なる問題領域に立脚しながらも、相互に照らし合って「カント＝フィヒテ問題」をより多面的かつ包括的に理解するための手がかりを与える。すなわち、自我という主体性の根拠、天才や狂信といった人間的能力の評価、そして空間という認識の形式——これらは一見ばらばらの主題に見えるが、いずれも「有限な人間がいかに自己を基礎づけ、世界を把握し、他者と共に生きるか」という根源的課題に収斂する。カントとフィヒテを三方向から照射することにより、両者の思想は単なる先後関係としてではなく、共通の問題圏をめ

ぐる動的な対話として把握されるのであり、ここに新たな研究の可能性が拓かれる。

この新たな視座は、研究史的にも重要である。従来のカント研究は批判哲学の内在的構造に、フィヒテ研究は知識学の体系的構造に焦点を当てる傾向が強く、その結果、両者を架橋する議論は「継承か断絶か」という二項図式に還元されがちであったといえる。本シンポジウムの三報告は、それぞれ異なる方法を通じてこの図式を相対化し、両者を「緊張と補完の関係」として捉える可能性を提示した点に独自の意義がある。

さらに敷衍すれば、この成果は現代的課題に対しても示唆を与えるものといえる。生命倫理や環境倫理の領域では、人間存在の有限性と責任の根拠が問われており、ここにカントの道徳法則とフィヒテの自我活動論を再読する意義がある。また、公共性の危機や多文化共生をめぐる議論においては、普遍的法の理念と国民的共同体の構想との緊張が、グローバル社会の秩序を考える上で示唆を与える。そして教育思想の分野でも、理性の自律を強調したカントと、国民的再生を教育に託したフィヒテの構想を併せて考察することは、現代の教育理念を再定位するための資源となろう。

総じて言えば、三報告は「自我」「媒介」「空間」という三つの視角から「カント＝フィヒテ問題」を立体的に照射し、その重なりと差異を通じて、新しい研究の可能性を切り拓いた。今後は、後期フィヒテの思想やカント以後の展開(シェリング、ヘーゲルなど)との関連、さらには国際的比較研究を視野に入れることで、この問題圏は一層豊かに展開していこう。カント生誕三百年という節目の年に、このような討議を通じて両者の思想関係を再検討したことは、研究史に確かな足跡を残すとともに、将来の哲学的対話を準備するものとなったといえよう。